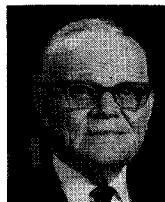


聖徒の道

9 1979



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
ヒュー・W・ピノック

教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

国際機関誌

ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」

赤松成次郎（翻訳部長）

もくじ

奉獻の律法の原則に従う	マリオン・G・ロムニー	1
シオンを打ち建てる6原則	R・クイン・ガードナー	5
断食の捧げ物	ラリー・E・モリス	10
質疑応答		14
夫を伝道に出した冬	ローザ・コーラー	17
インディアンのでんせつ	ナネット・ラーセン	21
アブラハムのいけにえ		24
アンナとアルバーティナのおいのり	ガートルード・M・リチャーズ	26
おもちゃばこ		28
さらに大いなる知識、信仰	G・ホーマー・ダラム	29
砂漠は喜びて花咲き	メリビン・レビット	33
人の起原と予言の成就	ジョージ・アルバート・スミス	39
ローカル・ニュース		44

聖徒の道 9月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
印刷所 株式会社 精興社
配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0416 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

大管長会メッセージ

奉 献の律法は、この最後の神権時代が始まつて間もなく啓示された。1831年1月2日、主は予言者ジョセフ・スミスを通して、設立後1年にも満たない搖籃期にあった教会に対して、次のように述べておられる。

「汝ら皆己が身の如くに兄弟を思うべし。汝らの中誰か十二人の息子を有つに、その一人にのみ偏よることをせざればその子たち

よく父に仕う。然るに、すなわち一人に向いて汝礼服を着けて此所に座せよと言ひ、また他に向いて汝ぼろを着て彼所に居れと言ひ、しかも息子たちに向いて、見よ、われ公平なりと言ふことを得んや。

見よ、こは一つの比喩を以て汝らに語るところなれど、正にわれ在るが如く真なり。われ汝らに向いて言わん、汝らひとつとなれ。

奉獻の律法の原則に従う

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

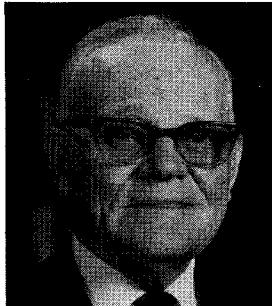


もしひとつとなならずば、汝らはわがものにあらず。」(教義と聖約38：25—27)

それから38日後の1831年2月9日、主は、富める者と貧しき者の間の不平等をなくす手段として奉獻の律法を啓示された。主は次のように命じておられる。

「汝らもしわれを愛すれば、われに仕えわがすべての誠命を守るべきなり。

見よ、汝ら貧しき者のことを思い起し、彼らに与えざるべからざる扶助のために、破るべからざる誓約と証文とを以て己が財物を神に奉獻せよ。



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

奉獻の律法の目的は、すべての人が「家族数と財政状態と乏しきと必要」(教義と聖約51：3) とに応じて平等になることであつた。

また汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり。汝らこれらの財物を、わが教会の監督とその副監督なる二人の長老、または大祭司ら、例えばかかる目的のために監督が聖職に任命せんとし、またはすでに任命して特に按手したる大祭司らの前に捧げよ。

これらの財物わが教会の監督の前に捧げられたる後、またわが誠命に適えるわが教会員より取り去る能わずと言うわが教会の財産奉獻に関するこれらの証詞を彼が受けたる後は、人々ことごとくわれに対して責任を持たされ、自己の財産を管理する者、すなわち自己と家

族とを養うに足るだけ奉獻によりて受けたる財物に就きての管理人とせらる。」(教義と聖約42：29—32)

奉獻の律法に関する基本原則ならびにこの律法が義とされる理由は、「万物は主のものであるということである。したがって、主は私たちが所有するいかなる財産もすべて求めることができる。すべて主のものだからである。(教義と聖約104：14—17, 54—57 参照)」(J・ルーベン・クラーク・ジュニア, *Conference Report*「大会報告」1942年10月, p.55)

奉獻の律法の目的は、すべての人が「家族

数と財政状態と乏しきと必要」(教義と聖約51：3) とに応じて平等になることであった。

奉獻の律法の下では、貧しい者も含めてすべての人が、その状態、家族数、乏しきと必要とに応じて、他の人と等しくする「配当」を受けるはずであった。

「証書によって監督から譲り渡された土地は、あなた自身が教会に証書によって譲り渡していた土地であろうと、……教会から完全な贈り物として受けたものであろうと、あなたが譲り受けて個人の所有物となったものはすべて『配当』(教義と聖約51：4—6) と呼ばれ、ある時には『管理の職』(教義と聖約104：11—12)，またある時には『ゆずり』(教義と聖約83：3) と呼ばれている。」(J・ルーベン・クラーク・ジュニア、「大会報告」1942年10月, p. 56)

聖徒たちは、ミズーリ州ジャクソン郡において「協同制度」を組織し、奉獻の律法に従って生活することを試みた。しかし、この試みは失敗に終わり、聖徒たちはミズーリ州を追われたのであった。

主は、彼らが失敗した理由と来るべき苦難について、次のように述べておられる。

「誠にわれ、わが苦しめる民の贖いに関するわが旨を知らんとして寄り集れる汝らに告ぐ、

見よ、われ汝らに告ぐ。われ一人一人に就きて言わず、教会員全体に就きて言うなれど、もしわが民罪を犯さざりせば彼ら今にも贖われ居りしならんに。

されど見よ。彼らはわが彼らに要求したるところにおとなしく従うことを覺らずしてあらゆる惡に満ち、彼らの中の貧しくして苦しめる者たちに聖徒たるにふさわしく物資を頒

たず。

日の榮の王国の律法の要求する和合一致に従いて一致協力せず。

およそ日の榮の王国の律法の諸原則によらずんば、シオンを建つこと能わず。これによりて建てば、シオンをわれに受け入ることかなわざるなり。

されば、わが民の律法に従順なることを覚るまでは必ずこれを懲しむるを要す。もし必ず要すれば、彼らの受くることによりて打ち懲しめらるるなり。

この故に、わが民罪を犯したるために、わが長老たちは暫しの間シオンの贖いを猶預することわがために必要なり。

そはわが民をして備えをなし、更に完き教えを受け、経験を持ち、その義務とわが彼らに求むることを更に完く覚らしめんがためなり。」(教義と聖約105：1—6, 9—10)

こうして、奉獻の律法を実施しようとした最初の試みは失敗に終わった。

それからおよそ100年後の1936年10月、大管長会は福祉プログラムの計画を発表した。

この計画の立案者であるJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、福祉プログラムと協同制度に関して次のように説明している。

「福祉計画は、協同制度ではないし、そのように意図されたものでないことは、私たちが皆言ってきたことである。しかし、終局において、教会福祉プログラムが完全な形で運用されたならば、主が定められた協同制度の偉大な基礎の確立はあまり遠くないと言える。

繰り返して言うが、まず第一に、協同制度は、財産の個人所有の原則を認め、この原則によって建てられたものである。人が協同制度の下で持っていたもの、また生活するため

に要したものは、その人自身のものであった。まったく明らかなことであるが、今日の私たちの制度の根本原則は、個人の所有権があるということである。

次に、協同制度における残余や余剰に代わるものとして、今私たちの下には、断食献金、福祉資金、什分の一がある。これらはすべて貧しい人の世話をするため、また教会の活動や業務を推進するために用いられる。結局のところ協同制度は、まず第一に極度の貧困に悩む人々をなくすための制度を確立することに主眼を置いたものである。これは福祉計画の目的である。

このことに関して、これらの初期の啓示からも、私たちの歴史からも、次のことが明らかであることを覚えなければならぬ。それは、持てる兄弟たちは、十分に与えていなかつたし、持たざる兄弟たちは明らかに、財産のある人たちからもらう物で、働くに生きていこうとしていたので、主はごく初期に、怠惰と貪欲という悪について、人々に警告されたということである。……

さらに、協同制度の下に、監督の倉庫があった。この倉庫には、貧しい人の必要と欠乏を満たす物資が集められた。現在、私たちには、同じ目的で福祉計画の下に、監督の倉庫がある。

すでに指摘したように、協同制度のもとで、奉獻の律法によって教会に集まつた剩余の財産は、教会の『共有財産』となり、協同制度のもとに、貧しい人のために使われた。私たちは現在、福祉計画のもとに、教会全体にわたって、ワード部土地計画がある。ある土地はすでにワード部が所有しており、またある所ではワード部が個人から借りている。この

土地は貧しい人のために農園となり、貧しい人たちが働く場を与える所となつた。……

兄弟たちよ、このように多くの重要な要素を踏まえて、福祉計画が今の段階まで発達したことで、広い意味で協同制度の基礎はすでに備えられていると言える。さらに各地のワード部において、人々が仕事であるいは農業で、立ち直る機会を与えられていることを考えてみても、私たちは、かつて協同制度の中で貧しい人が共有財産から与えられたのと本質的に違わない、ひとつの計画を実施している。」（「大会報告」1942年10月、pp. 57—58）

私たちは現在、奉獻の律法に従うように求められてはいないが、すでに福祉プログラムを実施している。このことを考えると、クラーク副管長が語っているように、福祉プログラムが完全な形で運用され、遠からず協同制度の偉大な基礎が確立されることだろう。奉獻の律法の原則に従う最もよい方法は、福祉プログラムの原則に従い、その務めを実行することであると思う。

それらの原則や務めには、怠惰と強欲を捨て、断食献金やその他の献金を惜しみなく捧げ、什分の一を正直に納め、また大管長会がこのプログラムを計画した目的に従うことが含まれる。その目的は以下の通りである。

「私たちの第一の目的は、可能な限り、いまわしい怠惰や施しのもたらす悪弊を除去し、独立心、勤勉、儉約、自尊心を再び私たちの間に確立する体制を築くことである。教会の目的は、人々の自立を助けることにある。勤労が再び教員の生活を貫く原則にならなければならぬ。」（「大会報告」1936年10月、p. 3）

シオンを打ち建てる6原則

R・クイン・ガードナー



シオンとは、この地上におけるイエス・キリストの王国に付けられた聖典上の名前である。(教義と聖約105:32参照)また、義しい生活をすると誓約した聖徒たち、福音の律法と儀式を完全に守って生活する「心の清き者」たちが住む所である。(教義と聖約76:54-70参照)

シオンはこうした場所のほかに、そこに住む人々や状態を指すこともある。しかしシオンの定義はすべて、他に比類するものない最高の状態、すなわち「心の清き者」が住む所という概念から派生したものである。なぜならば、誓約の民イスラエルが実際に「心の清き者」となった時に初めて、その約束は成就され、完全なシオンが確立されるからである。

この社会が福千年で完全な状態になる時、この地上にシオンをおいてほかに私たちの住むべき社会は存在しないであろう。このシオンこそ、イエス・キリストが統治される社会だからである。しかしシオンは今この未来の

栄光に向かって前進し、聖なる都、神の幕屋となり、心の清い人々が住む所とならなければならない。(モーセ7:62参照)

末日のシオンに住む人々が「日の栄の王国の律法の諸原則」に従って初めて、このことが達成されるのである。さもなければ、「シオンをわれに受け入れることかなわざるなり」(教義と聖約105:5)と主は言っておられる。

私たちは今日、これらの諸原則に従って生活することが急務である。なぜならば、主の再臨に備えるためにこの時代に、そのシオンが建てられる、また建てられなければならないと宣言されているからである。

スペンサー・W・キンボール大管長は、1977年10月の総大会の福祉部会で、この日の光栄の律法の原則について述べている。「福祉の根底をなす6つの原則」と題したその説教の中で、キンボール大管長は、「私たちはこれらの真理を実践してこそ、理想のシオンへ近づくことができるるのである。」しかもその理想のシオンこそ、「神権に基づく最高の社会」である

と指摘された。

1. 愛

「第一にあげられるのが、愛である。隣人に対する私たちの愛、さらに主に対する私たちの愛は、私たちがお互いと貧しい人、悩んでいる人に対してどのように行動するかによって測られる。」(『福祉活動：福音の実践』「聖徒の道」1978年2月号, p.118)

シオンは次元の低い愛で建てる事はできない。誓約と贖罪の力にすべてをゆだねる人々に賜としてもたらされる「キリストの純粋な愛」が必要である。(モロナイ7:44—48参照)

愛の精神にあふれた家庭から兄弟愛で結ばれた神権定員会まで、また兄弟愛の下に働く福祉農園から友情を分かち合う扶助協会まで、教会のプログラムや福音の計画のすべてが、この至高の資質である愛を私たちの中に育んでくれる。キリストの純粋な愛は清めの力である。私たちを「心の清き者」(教義と聖約97:21)にする唯一の大いなる力である。

2. 奉仕

「第二は奉仕である。奉仕とは、自己を空しくし、助けの必要な人を助け、『貧しい者に持物を分け与え、飢えた者に食物を与えて、……キリストのため、あらゆる艱難をその身に受け』ることである。(アルマ4:13)」(『聖徒の道』1978年2月号, p.118)

教会生活の長い人は、奉仕が王国におけるすべての働きの中心であることを知るであろう。両親は教えと模範の両方で、人々に奉仕することの大切さを私に教えてくれたが、私が奉仕の本当の意味を理解したのは、執事定員会のレッスンの時であった。ある日曜日の朝、執事定員会アドバイザーが私たちの注意散漫な心を何とか集中させようとして、自分の両手を頭の上に置いてこう言った。

「皆さん、目を閉じて下さい。私はこれから自分で自分に祝福を授けますので。」

私は驚いて大声で叫んだ。「自分で自分に祝

福を授けるなんて、そんなことできませんよ。」

「どうしてですか。」

「だって、祝福はだれかほかの人から授けてもらうものでしょう。」

私は自分の言っていることが間違いないと確信していた。しかし、なぜかと聞かれても理由を説明することはできなかった。レッスンの終わりに、この優秀な教師は、他人に奉仕する時に、私たちは自分自身に祝福をもたらすことができることを教えてくれたのである。

3. 労働

「第三は労働である。労働は、幸福と繁栄と自尊心を生む。またあらゆることを成し遂げるための手段である。怠惰はこの反意語である。私たちは働くよう命じられている。(創世3:19参照)私たちの物質面、社会面、情緒面、靈的面での安寧を施しによって得ようすることは、労働によって物を得るよう命じられた神の戒めに反する。労働は教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」

(教義と聖約42:42; 75:29; 68:30—32; 56:17参照)」(『聖徒の道』1978年2月号, p.118)

労働が教会員の生活を貫く原則であるとすれば、労働の目的は利己的に富をためることではなく、むしろ私心をなくして王国建設のために働くことでなければならない。この神権時代に、主は私たちに、自分の持つ財産を貪ることがないようにと警告された。(教義と聖約19:26参照)

キンボール大管長は、「偽りの神々」という記事の中で、近代のイスラエルをこう定義している。「しかし恐ろしいことに、多くの人々は牛や羊、土地や建物、また富に満たされすぎて、偽りの神であるそれらのものを崇拜し始め、それらのものに支配されるようになってきた。……人々は永遠の幸福を願って多くのお金、株、債券、有価証券、土地、クレジットカード、家具、自動車、その他この世の

安易な生活を保証するもので身を固めるためほとんどの時間を費やしている。私たちの務めは、与えられた豊富な資源を家族や定員会で用いて神の王国を築くことであるという事実を見落としているのである。すなわち、伝道、系図・神殿活動を推し進め、子供を立派な主の僕に育て上げ、祝福をあらゆる方法で他の人々に分け与えることが務めなのである。」（『偽りの神々』「聖徒の道」1977年8月号、p. 351）

4. 自立

「第四は自立である。教会と教会の会員は、自立するよう主から戒められている。（教義と聖約78：13—14参照）

各人の社交面、情緒面、靈的面、肉体面、経済面における安寧を維持する責任は、第一に本人、第二にその家族、第三にその人が忠実な教会員であれば教会が負う。

肉体および情緒面で健康な末日聖徒は、自分と自分の家族の安寧に関して、その責任を他人に譲り渡すことはできない。主の導きを受け、力を尽くすならば、物心両面で自分と自分の家族を養うことができるはずである。（I テモテ5：8 参照）」（「聖徒の道」1978年2月号、pp. 118—119）

自立は末日聖徒にとって欠くことのできない特質である。だからと言って、ほかの人々をまったく必要としないということではない。自立とは、自由意志を働かせ、才能と能力を使って、自分に課せられた責任を自分の力で果たすことである。私たちが自分自身に対してどのような責任があるかを測るよい方法は、次のように問うてみることである。「主は一体、このことに関してだれの責任を問われるだろうか。（例えば、朝起きるのはだれの責任だろうか。自分で嘘をついた時、それは一体だれの責任だろうか。）自分自身の責任だろうか、それともほかの人の責任だろうか。」そう明な知識と豊かな心を持っている人ならだれでも、その答えは容易にわかるはずである。

しかしながら、福音の中で私たちが主に約束していることは、私たちは自立を乗り越えて、豊かな実りをなす民になるということである。つまり、私たちは自分の必要を満たすだけでなく、余っている分を、主の方法によってほかの人々を助けるために使うのである。

5. 奉献

「第五は奉獻である。これには犠牲が含まれる。奉獻とは、靈的面であれ物的面であれ、助けを必要としている人のために、また主の王国の建設のために、自分の時間と才能と財産を提供することである。福祉活動における奉獻には会員たちが生産事業で働くこと、デゼレト産業に材料を寄付すること、専門的な技能を分かち合うこと、惜しみなく断食献金を納めること、ワード部および定員会の奉仕活動に参加することがある。また、ホームティーチングや家庭訪問でも時間を奉獻する。私たちは自分を捧げる時、奉獻しているのである。」（「聖徒の道」1978年2月号、p. 119）

多くの教会員は奉獻という言葉を聞くと、主が正式に定められた法的な抱束力を持つ経済制度、すなわち現在一時的に実施を据え置かれている奉獻の律法のことのみを思い浮かべる。したがって、奉獻の原則は今日の教会にまったく適用されないと考えている。しかし、その考えは正しくない。この奉獻の律法はやがて主が定めたもうた時に、主の予言者を通じて正式に実施されるであろうが、主は、神殿のエンダウメントの中で交わす奉獻の誓約までも撤回されたわけではないのである。この誓約は完全に有効であり、末日聖徒が実際に守らなければならない律法である。そして、その律法を守れる者だけが、将来再び奉獻の律法が確立された時に大きな祝福を享受できるのである。

日常の生活の中で私たちが奉獻の律法を守る具体的な方法としては、什分の一を納めること、断食献金を惜しみなく納めること、建築や神殿の基金、福祉農場や施設の購入のた

めに献金すること、専任宣教師を経済的に援助すること、仕事の技術を伸ばすために会員たちを訓練することなどがあげられる。

主は、「われにかかるすべては靈のことなり」と述べておられる。したがって、物質面での奉獻はとりもなおさず靈的面での清めを得る方法でもあるのである。このような真心からの奉獻と清めこそ、シオン、すなわち心の清き者を生み出すのである。(教義と聖約29:34参照)

ヒラマンは忠実な人々について次のように記している。「しかし謙遜な人々はたびたび断食して祈り、ますますへりくだつていよいよ固くキリストを信仰したから、喜びと慰めとがその心に満ち、その胸は清く神聖になった。このようなきよめはこれらの人々がその心を全く神に従わせたからできたのである。」(ヒラマン 3:35)

私たちが奉獻の律法とその誓約に伴う義務を完全に果たし、私たちの心と思いをすべてキリストに捧げができるようになる時、完全なシオンの社会が築かれ、この地上における救い主の統治が始まるのである。

6. 管理

「第六は管理である。教会における管理とは、靈的面もしくは物質面において神より委託を受けることであり、これは責任が伴う。万物は主のものであり、私たちは自分の体、心、家族、財産を管理しているに過ぎないのである。(教義と聖約104:11-15参照)忠実な管理人になるには、正義に基づいて治め、自己に属するものを世話し、貧しい人乏しい人に目を向ける必要がある。(教義と聖約104:15-18参照)」(「聖徒の道」1978年2月号、p.119)

管理の職は普通、奉獻の律法の制度から生したものであると考えられている。(奉獻の律法は、すべてのものは主に属するという真理を基としている。したがって、私たちは自分の持ち物をすべて主に奉獻しなければなら

ない。そこで主は、本人とその家族に必要な財産の管理を託して下さる。そして管理を託された人はその管理の職をどのように果たしたか主に報告する責任がある。(教義と聖約42章)しかし、この管理の原則は現代のバプテスマや奉獻の誓約の中にも生きているのである。

私たちが持っているものはすべて、管理をゆだねられたものである。私たちの時間、才能、財産、家族、教会の召し、神権の職など、すべて個人の管理の職の一部として私たちに託されたものである。そして、私たちはその管理の職をどのように果たしたか主に報告しなければならない。

私たちは、この管理の原則をこの世でまず十分身に付けておくことが大切である。それは、この管理の原則がこの世だけでなく、永遠にわたって運用される法則だからである。「主はあらゆる管理人の手より、今もとこしそれにも管理人の職に関する報告書を差出することを求むる。」(教義と聖約72:3)

要するに、私たちが家族のことや神権の責任をどのように管理し果たすかによって、王国の民として幸福になれるかどうかが決まるのである。現在管理の原則を忠実に守っている末日聖徒は、将来のシオンの社会の建設に貢献しているだけでなく、自分自身の救いにも寄与しているのである。「およそ何人にまれ、忠実にして正しく、且つ賢き管理人はその主の悦びに入りて永遠の生命をつぐべし。」(教義と聖約51:19)

結論を申し上げれば、これらの6つの基本原則を完全にしかも絶えず守って生活する人は、普通の人々が経験している以上の気高い生活をこの地上で確立することができるということである。そして、力強く純粹な彼らの模範は必ずや世の旗印となるであろう。

そのような社会の築かれる日が必ずくるであろう。主は次のように述べておられる。

「またかくの如く、わが永遠の誓約を世に遺りて世の光となし、またわが民とこの光を

求め来る異邦人とのために一つの旗となし、わが前に道を備うるためわが前に立つ一人の使となしたり。……

義しき人々はすべての国民の中より集められ、永遠の悦びの歌を唱いてシオンに来らん。」(教義と聖約45: 9, 71)

また主は次のようにも約束しておられる。『シオンは繁栄して主の栄光そこに留らん。……

而して万国の民シオンの怖るべきによりておののき、シオンの怖るべき者たちによりて怖るる時至らん。』(教義と聖約64: 41, 43)

シオンは様相を変えているので、私たちはその成長を必ずしも認識できないかもしれない。しかし、教会の最近の発展は、この進歩の度合が速まっていることを如実に物語っている。

キンボール大管長は私たちに、シオンを確立するために「歩みを速めるように」と呼びかけ、ビジョンを持つだけでなく、それを実行に移すようにと言われた。

「心の中にこのビジョンを持つことは非常に大切であるが、単にシオンを定義づけ、言葉を述べるだけでは、シオンを実現することはできない。教会員一人一人が日々絶えず努力を重ねることによってのみ可能である。したがって、どのように苦しくても、また犠牲を要求されても、私たちはそれを行なわなければならない。」(『心の清い者となる』「聖徒の道」1978年10月号, p. 128)

教会のすべての活動がシオンの発展に寄与している中で、特に伝道、系図・神殿活動、福祉はそれぞれ特別な役割を担っているように思われる。

教会員は系図探求を行なうことによってシオン山の救い手となる。また神殿に参入し、誓約を新たにすることによって、シオンの社会を打ち建てるための日々のチャレンジに対して自分を備え、力を得ることができる。

また福祉活動を通して、私たちは神殿で交わした奉獻の誓約を守って生活する方法を教

えられる。つまり、断食献金を惜しみなく納め、福祉活動のために献金し、貧しい人、困っている人、悩んでいる人を助けるために時間と才能と財産を捧げる機会が与えられる。

愛、奉仕、労働、自立、奉獻、さらに忠実な管理人として伝道、系図・神殿活動、福祉の義務を果たす。私たちにとってこれほど尊い召しはない。しかもその召しを果たす過程で、私たちは心を清められ、肉体を再新されるのである。(教義と聖約84: 33参照)このようにして、私たちは主がエノクに告げたもう1誓詞をこの身に受けられるようになるのである。

「われまた正義と真理とをして洪水の如く地をあらい去り地の四極よりわが選民を集めて、わが備うべき地聖なる都に至らしめん。……わが幕屋はその地にあるべし。而して、そはシオン、すなわち新エルサレムと呼ばれん。

また主、エノクに言いたもう。それより汝とすべて汝の市の者は、わが選民とその地にて逢わん。而してわれら、彼らをわれらの懷に受け入るべし。かくて彼ら、われらと相見ん。われら彼らの首を抱き彼らわれらの首を抱きて互いに口づけせん。

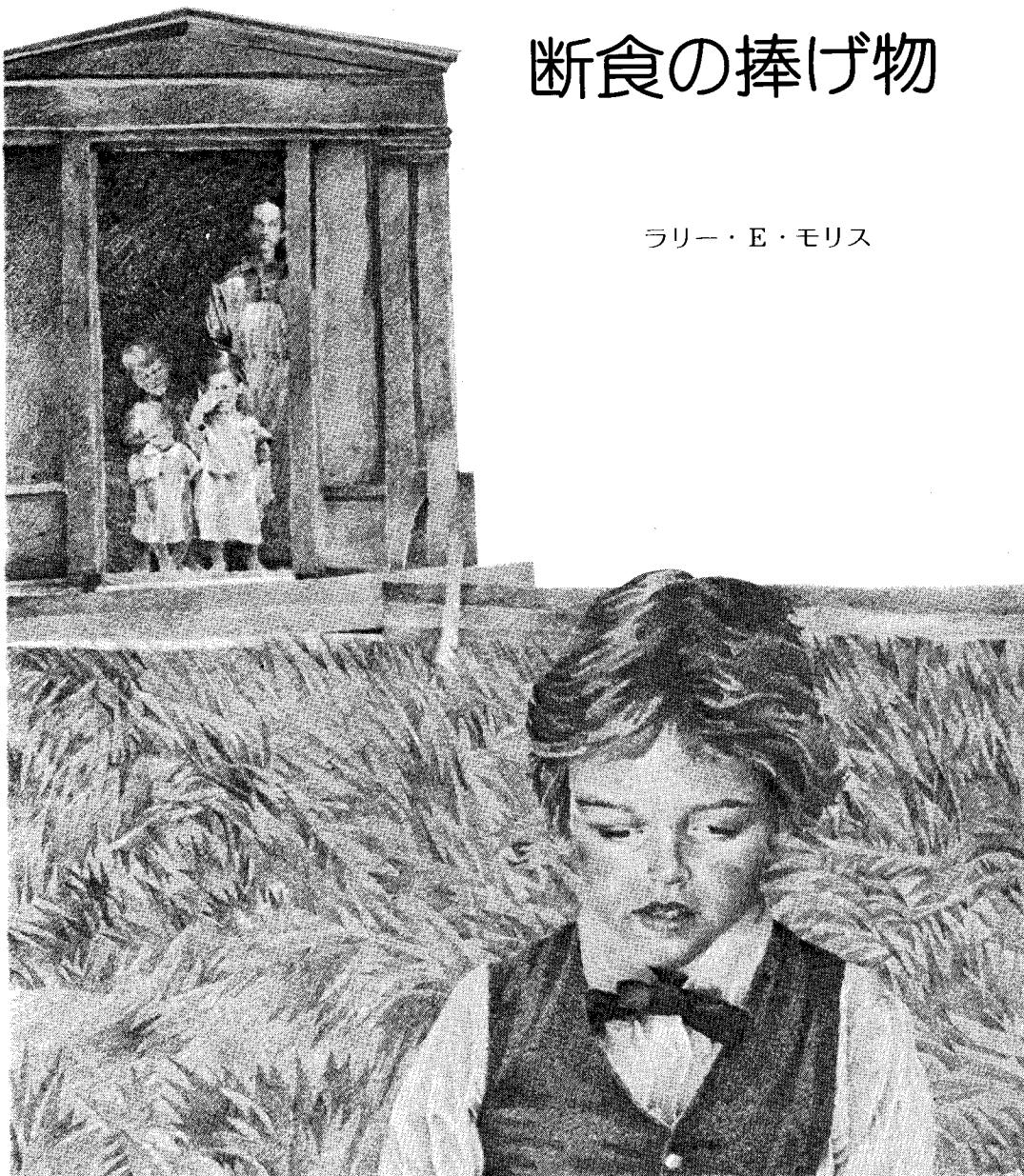
而して、わが住む所あらん、そはシオンたるべし。シオンは、わが造りしすべて造られし物より出で来るべく、一千年の間地は休息を得ん。」(モーセ7: 62—64)

将来への大きなビジョンと望みを心に描きながら、私たちは、キンボール大管長がシオンの建設のために祈った言葉をもう一度心に留めてみる必要があるのでないだろうか。

「この愛の絆によって結ばれ、この末日にシオンを築き上げ、神の王国を出て行かせて天の王国を来らせるために、心を完全にひとつにして祈ろうではないか。」(『心の清い者となる』「聖徒の道」1978年10月号, p. 130)

断食の捧げ物

ラリー・E・モリス



開 拓時代のことである。ソルトレーク・シ

ティーに住むひとりの執事の少年ウイラード・R・スミスは、担当地区の「断食の捧げ物」を集める責任を受けていた。監督者はピーター・ライド兄弟で、断食の捧げ物を集め、それを貧しい人々のもとに届けるのが責任であった。彼は毎週金曜日の晩にウイラードの家を訪れ、捧げ物を集めて回る小さな「急行馬車」をきれいに掃除し、油をさして、準備の整っていることを彼に告げるのだった。

ウイラードは担当地区的家を教会員、非教会員の区別なく一軒一軒訪問しては、貧しい人のために何かを寄付してもらうことになっていた。

ある土曜日のこと、ウイラードが属しているフットボールチームが試合をすることになった。しかしその日は断食の捧げ物を集める日であった。結局彼は「何としても試合に出たかった」ので責任を捨てて自分の楽しみの方を取りフットボールの試合に出かけた。

翌朝早く、ライド兄弟が裏口の戸をたたき、私に会いにやってきた。私は良心の呵責を感じ、逃げ出してどこかに隠れたいと思った。私は彼の前で顔を上げることができなかった。しかしライド兄弟は一言こう言っただけであった。『ウイラード、少し散歩する時間はあるかい。』私は彼について行くと、初めに街角に近いある小さな板張りの家に向かった。ライド兄弟が入口の戸を静かにたたくと、背の低いやせ細った婦人が出てきた。

『ライド兄弟、きのう食べ物をいただけませんでした。今は何も食べ物がありません。』

ライド兄弟はすまなそうに答えた。『申し訳ありません。きょう中に必ずお持ちします。』

次の家を訪れた。戸をたたくと、『どうぞ』という声が聞こえた。

家の中では老夫婦がベッドに横たわっていた。『ライド兄弟、石炭がないので、こうして寒さをしのぐしかありません。』

別の家では、小さな子供たちと母親が体を寄せ合っていた。赤ん坊は泣き、子供たちの

顔は涙でぬれていた。

もう十分だった。別れ際にライド兄弟はやさしく言った。『ウイラード、だれかが務めを怠ると、だれかが苦しむんだよ。』

私は務めを怠ったことを悔み、泣きたい思いだった。ライド兄弟は私の肩に手を置くと、帰って行った。その日の午後には、食物と石炭が届けられた。私は貴重な教訓を学んだのである。』(Program Outline for Teaching Observance of the Law of the Fast 「プログラムの概要、断食の律法遵守の教え方」1965年, pp. 19-20)

スミス兄弟の経験から、断食献金を納めるということは、単にお金を封筒に入れるだけのものではないことがおわかりだろう。それによって、本当に困っている人が助かるのである。それなのに、私たちは時として、断食献金を納めることの大切さを忘れたり、軽視したりすることがある。私たちの多くは什分の一を正しく納めるようにとよく強調する。そして、什分の一を納める人は主の再臨の時に救われると教えられている。ユタ州セントジョージでのロレンゾ・スノー大管長の経験(映画「天の窓」に示されているように、たとえかんばつであっても彼らが什分の一を納めれば、その地域に雨が降ると約束した)のことをよく聞いている。また什分の一を納めない人は神のものを盗んでいるとも教えられた。〔マラキ3:8-10参照〕

しかし、この聖句の意味をよく考えてみると、極めて重大な真理が隠されていることがわかる。「どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか」という質問に対しても、主は「十分の一と、さしげ物をもってである」(マラキ3:8)と答えられた。断食献金の重要性を教会員に深く理解させるため、教会幹部は最近この点を特に強調するようになっていく。断食献金は、重大な関心を向ける必要のあるものである。ヒーバー・J・グラント大管長は次のように述べている。「私たちの民の福祉の根底にある律法は、断食献金である。」

1971年にマリオン・G・ロムニ副管長は断食献金を2倍にするようチャレンジし、もしそうするなら、教会の靈性は2倍になるであろうと約束した。

また、1974年にスペンサー・W・キンボール大管長はこう述べている。「最近組織されたばかりの支部であっても、会員たちが断食献金を納めているならば、ほとんどの場合自ら必要をまかなえるはずである。できない理由はまったくない。」(Conference Report「大会報告」1974年4月, p. 184)

主は、貧しい人や困っている人を顧みない者は「わが弟子にあらざればなり」(教義と聖約52:40)と言われた。断食献金を納めることは、貧しい人々に心を向け、私たちがキリストの弟子であることを示す、主の定められた方法なのである。

もちろん、断食献金を納めることは必ずしも容易ではない。しかし、教会に納める他の献金と同じように、それは私たちの忠実さを測るものである。ある兄弟は、次のように自分の経験を語った。

「私が英国のオックスフォード大学で学んでいた時のことである。私は合衆国に帰省する準備をしていた。残されたお金もわずかしかないというのに、それを3つのことに充てなければならなかった。断食献金とワード部予算を納めること、旅行用のトランクを買うこと、それに空港までの交通費の3つである。お金はどうみても、このうちのふたつしかなかった。私は断食献金とワード部予算を納めることを後回しにすることにした。ところが教会に行った時に、まず断食献金を納めるようにという思いが強くしたので、その思いに従った。残ったお金ではトランクを買うか、交通費に充てるかのいずれか一方しかできない。ところが、しばらくして私が通りを歩いていると、ひとりの人がトランクを運んでいた。どうするのだろうと思って尋ねてみると、それを捨てに行くところだと言う。私はしばらく彼と話し、結局そのトランクをもらうこ

とになった。これで問題は解決した。これは、断食献金とワード部予算を納めたことによって主から与えられた大きな祝福である。」

またある兄弟は、ステーキ部指導者会に出席し、そこで断食献金を2倍にするようチャレンジを受け、そうするなら収入が増えるであろうという約束を受けたという。そのことについて次のように語っている。

「私は帰宅すると、この約束を妻に話した。私たちはそれまでも断食献金をかなりの額納めていた。それでも私たちは喜んで額を2倍にした。しかし、利己的なことのためにそうしたくはなかった。祈り、深く考えた末、私たちは2倍の断食献金を納めることに決めたのである。それから間もなくして、仕事の上で思いがけない好機が次々に訪れた。そして1年後に、収入は驚くほど増えたのである。私たちはこれこそ主の祝福であり、主の僕を通して下された約束の成就であると感じた。」

大切なことは、どちらの場合も、自分の利益を考えて行動したのではないということである。ただ主に仕えたいという気持ちから行なったことであった。彼らは貧しい人を援助するために、自ら進んで犠牲を払ったのである。

この犠牲の原則が、断食の律法を守る根底となっている。断食献金の額は、最低2食分に相当するとされているが、キンボール大管長は次のように述べている。

「私たちは時折、惜しむ気持ちから、朝食を卵1個で済ませているので、それに相当するお金を主に納めようと考えることがある。現在は多くの人が裕福であると思うが、裕福な時は、もっと寛大になる必要がある。」

私は、断食した2食分の金額ではなく、できる状態であればもっと多く、10倍以上の金額を納めるべきであると考えている。もちろんこれができない人々のいることも私は承知している。」(Conference Report「大会報告」1974年4月, p. 184)

断食献金はそれを受ける人だけでなく、与

える人にも祝福をもたらす。キンボール大管長はこう語った。「もし私たちが惜しみなく断食献金を納めるならば、私たちは靈的にも物質的にもさらに繁栄するであろう。」(『福祉活動：福音の実践』「聖徒の道」1978年2月号, p. 120)

私たちが次のようなステップを踏む時に、断食献金を納めることは、一層意義深い経験となるであろう。 1)断食日前の家庭のタベで、断食と断食献金を捧げる理由について話し合う。 2)目的をもって断食を行なう。だれかのために特別な祝福を願って断食を行なうのであれば、食物を取らずに出かけることや献金する態度の中におのずと誠意があふれることだろう。(小さな子供まで断食するよう勧められてはいないが、段階を追ってこの原則について教え、断食ができるように導くことはできる) 3)家族全員が断食献金を納める。子供たちも断食献金を納めることによって、大切な教えを学ぶことができる。金額に関係なく、与えるという行為が大切であることを強調する。 4)断食日は特別な祈りで始め、特別な祈りで終わる。

また、ウイラード・スミスが学んだように、断食献金は貧しい人の生活に直接影響を及ぼすということを、家族全員が認識することも大切である。この断食献金は、教会の他のいかなるプログラムのためにも使うことはできない基金であり、ただ困っている教員のためにのみ使用されるものである。

断食献金がどのように使われるかは、監督のもとへ援助を依頼に行った3人の子供を持つ未亡人の例を見るとよく分かる。彼らには生活するお金がなく、多くの人々から借金をしていた。そこで監督は貸主に手紙を書き、情報を説明した。すると15人の貸主から返事が届き、借金の50パーセントについて譲歩してくれることになった。それから3ヶ月以上の間、断食献金の中から数百ドルが支払われ、借金が完済された。このことは家族にとって、経済的にも靈的にも大きな助けとなった。そ

の後数カ月たち、数年たつうちに、この家族は健全な財政計画のもとに生活を送ることができるようになった。そしてふたりの息子は伝道に出、子供たちは3人共神殿で結婚した。断食献金が正しい時に、しかも正しく活用されたことによって、この家族は再び人並みの生活を送ることができるようになったのである。

このような経験は教会にあって珍しいことではないが、この話から、断食の律法に従うことによってもたらされる祝福がどういうものかよくお分かりいただけたと思う。すなわち、困っている教員は必要な援助を受けると同時に、自分が愛されているということを知って靈的に高められる。また与える側も断食をし、その分を献金することによって成長し祝福を受けるのである。

ほかにもまだ祝福がある。それは永遠の見地から見ると、他のいかなる祝福よりも大切である。すなわち、断食の捧げ物を惜しみなく差し出すことにより、奉獻の律法に対する備えができるということである。これに関するロムニー副管長の言葉を引用してみよう。

「シオンと地球の贖い、そして協同制度の実施を待つ間、私たちは……断食献金や什分の一、福祉活動など現在行なわれていることを行なうことにより、その範囲内で協同制度に基づいた生活をする必要がある。これらの戒めを守ることによって、私たちは自分の望みに応じて協同制度の基本原則を自らの生活に取り入れができるのである。」(Improvement Era「インプレーブメント・エラ」1966年6月号, p. 537)

断食の律法すなわち断食と祈りと断食献金の納入をまごころから行なうことは、私たちが神のようになるために是非とも必要なことである。現行の福祉プログラムの原則に完全に従えずに、どうして永遠の律法である奉獻の律法の備えができるだろうか。

夫を伝道に出了した冬

ローザ・コーラー

ローザ・コーラーは背の低い女性である。その上、93歳という高齢のために少し腰が曲がって、ますます小柄に見える。そんなわけで人と話をする時にはどうしても下から見上げる恰好になり、目が一層大きく見える。その目がいつも明るく、愛らしく輝いているので、人は皆、彼女に引きつけられるのである。ローザが今住んでいる家はレンガ造りの小さな家であるが、周囲には緑濃い大木が茂り、年中家や庭に影を落としている。昔は彼女自身も木を植え、屋根の梁に使う木材を切り出したこともあった。その梁は今でも立派に役目を果たし、その家に住む人々を風雨から守っている。冬でも部屋は暖かく、夏になるとレンガの壁のために部屋全体がひんやりとして心地良い。これは、そのような家に住むローザ・コーラーというひとりの女性が夫の伝道について語った物語である。



私と夫は、1903年の春、ローガン神殿で結婚しました。結婚して3日目、夫は乳牛を一頭買ってきました。自分たちで作った、新鮮な牛乳が飲めるのは本当に素晴らしいことです。結婚して1年過ぎた時、最初の男の子が生まれました。その頃、私たちはユタ州プロビデンスに土地を買い、家を建て始めました。そして結婚して丸2年と1日たった日に、私たちはまだ未完成の家に引っ越したのです。次男が生まれたのは、その翌月のことです。

当時私たちの暮らしは決して楽ではありませんでしたが、結構幸せな毎日でした。毎晩、夕食を終えると、家の周りの木を切り倒して丸太を作り、家を建てました。夫婦で協力してのこぎりをひきました。押したり引いたりしながら、私たちは丸太から角材を造ったのです。また、牧草地を耕して畑を作り、野菜を植えると、すぐに食卓をぎわすおいしい野菜の収穫にあづかることができました。

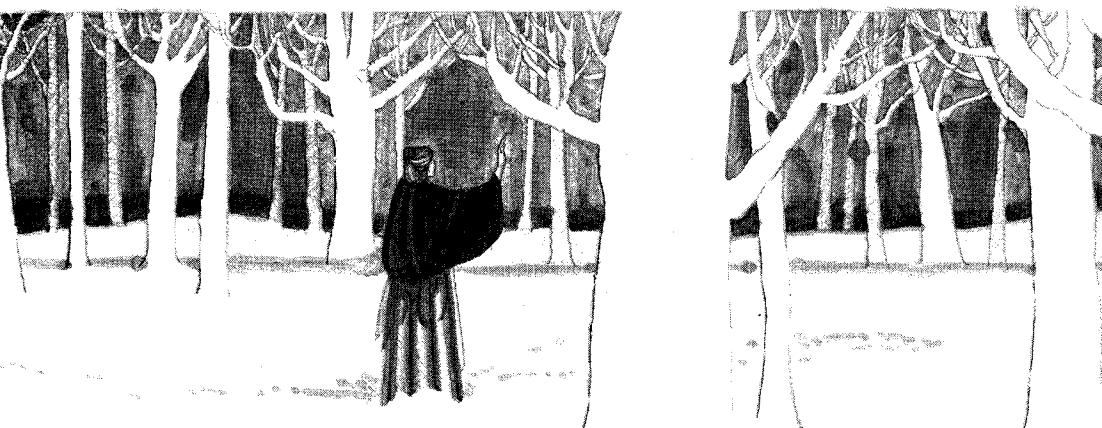
このようにして新しい家の楽しい生活が2年を過ぎた頃、3人目の子供が生まれました。今度は女の子でした。私はその日のことを決して忘れることができません。その子が生まれたのは午後の3時頃でしたが、4時近

くなって、監督が家を訪れて下さいました。私たちはてっきり監督が生まれたばかりの娘を見にきたのだと思ったのです。ところが、監督は子供ではなく、夫に会いにきたのでした。

「コーラー兄弟、今晚私がお伺いしたのは、あなたを宣教師として召すためなんです。1月6日にここを発てるよう準備していただけますか。」

私たちは何も言えませんでした。すると沈黙を破るように監督がこう言いました。「数日中に、この用紙に必要事項を記入して下さい。」私たちは差し出された用紙を受け取りました。そして、よく考えてみますとだけ答えました。監督が帰った後も、私たちはしばらく互いに顔を見合わせていました。今何をすればよいのかよくわかつっていました。そうです。断食と祈りです。天父は私たちを助けて下さるはずです。私たちはこれまで常に主から命じられることを行なうように努めてきました。

私たちは断食と祈りによって確信を得、私が夫に代わって用紙に記入しました。(夫は私をいつも秘書と呼んでいました)こうして私たちは心に非常によい気持ちを覚えながら監督にこの用紙を差し出すことができました。



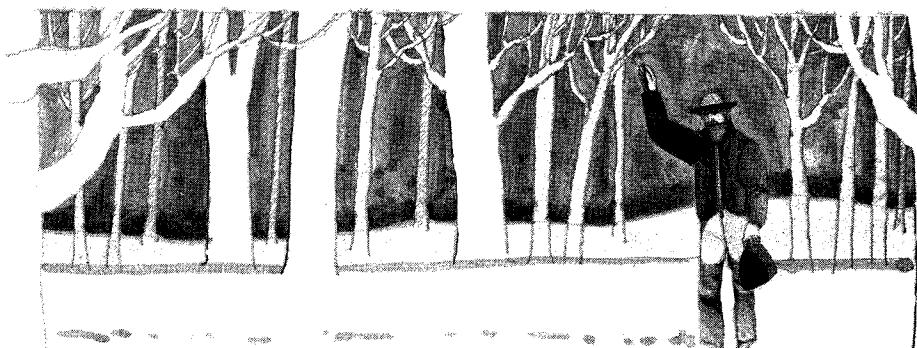
それからというもの、私たちは伝道に出る夫と、少人数ながらも残された家族を養うために、わずかばかりの収入をできる限り切り詰めてお金を貯めました。その年のクリスマスは、実にささやかでした。それでも私は子供たちのためにプレゼントを作り、子供たちもそれをとても喜んでくれました。

ついに、1月6日がやってきました。肌を刺すような寒い朝でした。私はこれからしばらくの間食事を準備することもない夫のために、とびきり豪勢な朝食を準備しました。子供たちは皆まだ眠っていました。そしてこれからは自分ひとりだと思った時、また夫や子供たちを養い、夫がこれまでしてきたいろいろな仕事を自分がしなければならないと考えた時私はその場にへなへなと座り込んでしまいそうになりました。そんな悲しみに打ちひしがれた私の心に、ある思いが湧き上がってきました。「あなたは、決してひとりではない。天父がいつも共にいて下さる。」すると今までの悲しい気持ちがうそのように消えてしまいました。早速、私は洗たく用の水をわかすなべを火にかけ、洗たくを始めました。仕事をすることで沈んだ気持ちもすっかりどこかに行ってしまったようです。

冬になると、凍り付いた干し草の山から干し草を切り出さなければなりません。手が凍えるような毎日でした。また、霜の降りた朝や凍てつくような寒さの夕闇の中で、手をかじかませながら牛の乳を絞ったこともあります。あの時ほど、春が来るのが待ち遠しかったことはありません。

春になればなって、また困ったことが起きました。私はそれまですきを使ったことがありませんでした。またすきを引く馬も飼っていませんでした。ところが親切な近所の人が馬を貸してくれることになり、私はどうしても自分の手で畑を耕すことを決心しなければならなくなりました。馬具を付け、すきを取り付けてから、自分の首にひもをかけて、畑を何度も往復したかわかりません。赤ん坊を乳母車に乗せ、ふたりの男の子に面倒をみてもらいました。耕した後はまぐわをかけ種を蒔くことができるよう、土をならしておかなければなりません。

ある涼しい春の朝の、まだ子供たちが寝ている時に、早蒔きの種をまきました。それから、種が芽を出し、順調に育っているかどうかを見るために、何度も畑に足を運んだことでしょう。ジャガイモを植えた時には、子供たち



が手伝ってくれ、私が掘った穴に切ったジャガイモを落してくれました。

夏が来た時には、みんなで大喜びしました。しかし、それは、灌溉の必要な季節になったということでもあります。いつも私たちの番が回ってくると、私は掘り割りの水門を開けて水を流し、幾つかのせきを造らなければなりませんでした。時には、自分の番が夜中になることもあります。水があれば、作物の成長も早くなります。しかし雑草もとらなければなりません。またたく間に牧草は伸び、刈り取らなくてはなりません。ぼやぼやして時間などないです。初めて牧草を刈った日には、朝の3時に起きました。鎌を振りおろすたびに、牧草の甘い香りが漂ってきました。いつももうこれで十分だと思うまで仕事をするのですが、それでも仕事がなくなるということはありませんでした。こうして毎朝早く、子供たちが目を覚ます前から働き、家畜に餌をやり、乳搾りをする前にまぐさを収穫しました。それでも、全部刈り取るのに4日かかりました。しかもそれで仕事が終わりではありません。次は刈ったまぐさをかき集めて、束にしなければなりません。そしてそれを今度は引っ張っていって、積み上げるのです。このようにして、暑い日中に丸一日かかって干し草を積み上げました。そしてようやく仕事から解放されたと思うと、今度は子供たちを寝せなければなりません。それから椅子に腰をおろすと、ほっと一息つくのです。

夏が過ぎる頃には、子供たちもめっきり大きくなっていました。でも、私は少しやせたようです。ある朝、イチゴが真赤に熟していたので、取ってきて朝食に出しました。新鮮で、本当に良い香りでした。やがて夏も終わり秋になると、いよいよ収穫の季節です。野菜を集め、ジャガイモを掘らなくてはなりません。こうして2年目の冬がやってきました。また冷たく、かじかむ手で干し草を切らなくてはなりません。しかも今度は新しく生まれ

た子牛の分も含めて、2頭分の餌が必要です。

私は伝道に出ている夫に週に3回手紙を書きました。しかし、生活がどんなに苦しくても、愚痴めいたことは一切書きませんでした。夫に立派に伝道を果たしてもらいたかったのです。そして何よりも余計な心配をかけたくなかったからです。その年の冬は特に長く感じられました。そして再び美しい春が巡ってきました。また私たちの生活が始まります。土地を耕し、種を植え、水をやり、雑草を抜く。それから収穫したものをびんに詰め、地下室に保存する。干し草の刈り入れもあります。でも私たちは幸せでした。

ある日のことです。私たちのお金が、ほとんど底をついていることに気がつきました。私たちはいつも毎週日曜日に断食をしていましたが、日曜日でないその日にも、断食をして祈ることにしました。天のお父様が必ず助けて下さることを知っていたからです。

それからしばらくして夫が所属している伝道部の部長から1通の手紙が届きました。その手紙には、夫が素晴らしい宣教師としてその召しを忠実に果たして無事解任されたことが書かれていました。その数日後に届いた葉書には夫が帰ってくる汽車の時刻が書かれていました。

私はまず馬を借り、それから隣の家に駆けて行って、馬車を貸してくれるように頼みました。もし近所の人が、汽車は夕方にならなければなりませんよ、と言ってくれなければ、そのまま出かけているところでした。汽車の来る時間が待ち遠しく、何十年も待っているかのように感じました。そして、とうとうその日がやってきました。とても天気がよくて、夕方でも遠くがはっきり見えるほどでした。遠くから響いてくる汽笛は、何とも言えない素晴らしい音楽のようでした。まさに感動の再会でした。私は天のお父様にすべてのことを感謝しました。これまでたくさんのこと主に祈ってきましたが、主はことごとく私の祈りに答えて下さったのです。

18 91年1月2日、19歳になるノルウェーからのひとりの移民青年が、ユタ準州カッシュ郡のローガン市にある自宅の椅子に座って何か書いている。そこにはこう記されていた。

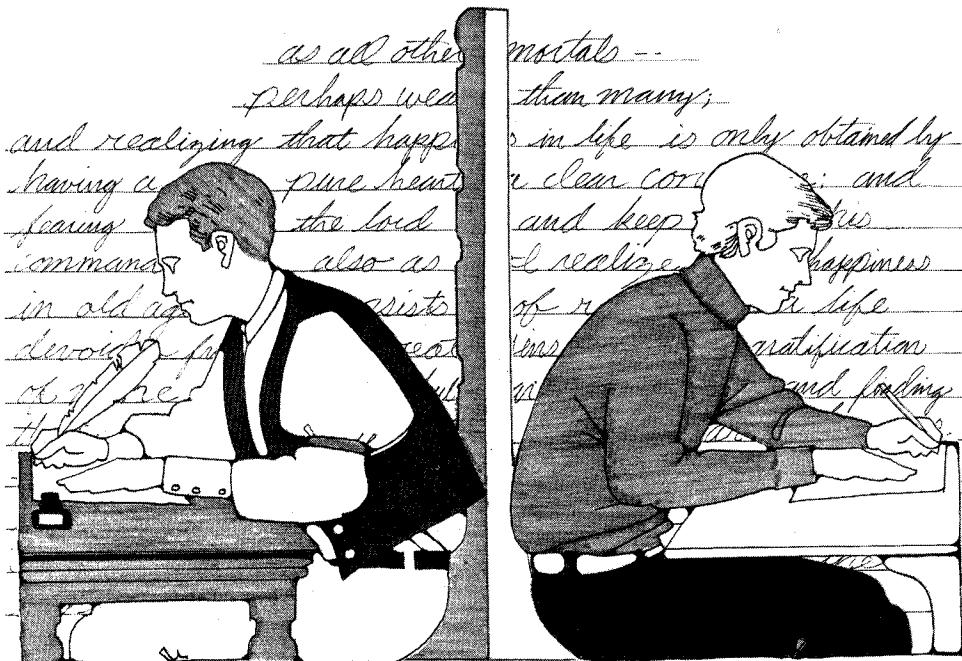
「ようやく私は自分というものがわかつたような気がする。私はほかの人と同じように弱い人間である。いや、多くの人よりもっと弱い人間かもしれない。人生で幸福を得るために、清い心と明らかな良心を持ち、主を畏れ、主の戒めを守ることである。また、

年老いてからの幸福は、大きな罪も犯さずにきた自分の人生を振り返り、気高い目標に向かって雄々しく歩んできたことに対する感謝の気持ちからくるものだということがわかつた。しかしこれまでの私の生活は決して好ましいものではなかった。そこで私は今後の自分の生活を正す意味で次のような実行目標を立ててみた。創造主であり、全能の御方である主が私を助けて下さるようにと願っている。」

そして17項目にわたる決意を書き記した。

さらに大いなる知識、信仰

七十人第一定員会会員
G・ホーマー・ダラム



それから、およそ8カ月後の1891年8月25日、彼は堅表紙の日記にそれを書き写した。この日記にはユタの田舎から出てきたひとりの学生が、マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学で経験する苦学の記録が記されることになるのである。彼は人生の指針となる17項目の決意を日記の初めに記したのであった。

1. 科学の中の科学である宗教に、生涯第一の関心を寄せる。
2. 毎日秘かに神に祈る。
3. 毎日神と神の属性について考え、自分も神のようになるよう努力する。
4. 場所や方法に関係なく、与えられる光と知恵と知識を享受する。
5. 一度それが真実であると確信したならば、その原則、信条、宗教を認めることを決して恥としない。
6. 時間を一瞬も無駄にせず、有効に使う。
7. 暴飲暴食をしない。
8. たとえ生命を奪われるようなことがあっても、自分がしたくないことは決してしない。
9. 毎日神のみ言葉を読み、神のみこころを学び、慰めと力と勇気を得る。
10. 純粹で簡潔な真理だけを語る。
11. 自分の義務だと思われることや、同胞にとって利益となることを常に行なう。
12. 生命のある限り全力を尽くして生活し、生けるしかばねのような生き方はしない。
13. 言葉や態度で相手を無理に自分の意見に従わせるようなことをせず、ただ自分の意見を率直に述べるようにする。
14. すぐに腹を立てたり、大声を出したり、

いろいろしたりして隣人を攻撃し、傷つける癖をなくす。

15. 母親に対する義務を一瞬たりとも忘れない。現在の私があるのも、将来の私があるのもすべて母親のお陰である。私のために人生の大切な一時を使って下さった母親に、与えうる限りの愛と眷れと敬意を捧げなければならない。同様に、兄弟や友人、同胞に対する義務も忘れないようとする。
16. やり始めた仕事はすべて成し遂げる。また、責任を引き受ける前に、その目的と結果についてよく考える。
17. 出会う人々すべてが自分の兄弟姉妹であることを常に忘れず、隣人の目からちらりと取ろうとする前に、自分の目にある梁を探す。

もし今日のすべての若い男性と女性が人生において自分の置かれている立場を同じように評価できるならば、素晴らしい結果を生むことだろう。

この決意書を書いた当時、この青年はローガンにあるブリガム・ヤング単科大学の学生であった。これは1891年の年頭のことで、その3カ月ほど前に、ウイルフォード・ウッドラフ大管長が啓示によって、「公式の宣言」を発表していた。まさに新たな追放と迫害と誤解の危機が末日聖徒を待ち受けていた時期である。

その青年の名前は、ジョン・アンドレアス・ウィットソーといい、夫に先立たれた母親と弟と一緒にみすばらしい小屋に住んでいた。家族は1884年にノルウェーから移民してきたのだった。そして1894年6月27日、この若い移民者はマサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学構内にあるサンダース大講堂

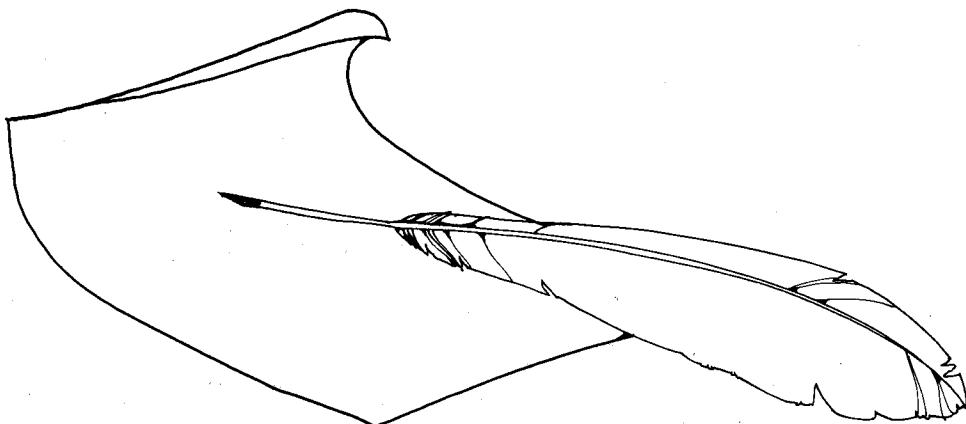
で、当時の学長チャールズ・W・エリオットから科学学士の称号を最高の成績で受けることができたのである。4年間のカリキュラムを3年で終えた彼は、まさに苦学の連続であった。未亡人の母と弟は、乏しい収入の中からわずかなお金で貯めて送金してくれた。そして残りの学費は、身を粉にして働いて得たお金と、ローガンに住む親切な友人から12%の金利を払って借りたお金でまかなった。

ハーバード大学を卒業してローガンに戻ると、彼は農業試験場の化学者として働き始めた。そして1898年6月1日、スーサ・ヤング・ゲイツの長女、美しいレア・ダンフォード娘と結婚した。その後若いふたりはドイツに渡

り、ゲーティンゲン大学で生化学の博士号を取得した。さらにスイスのチューリッヒ・ポリテキナム、および英国のロンドン大学で研究を重ねた。

ヨーロッパ滞在中に、大学理事会の理事長から電報が入りブリガム・ヤング単科大学の学長として迎えたいと言ってきた。ところが翌日、ジョセフ・F・スミス副管長から一通の電報が届いた。それには、ブリガム・ヤング単科大学の学長の椅子を断わって、今すぐユタ州立大学に戻り、世界の乾燥地帯を潤す科学的な乾燥農法と灌溉計画の研究を行なうために自分が建てた農業試験場を手伝ってほしいと記されていた。

1. 科学の中の科学である宗教に、生涯第一の関心を寄せる。
2. 毎日秘かに神に祈る。
3. 毎日神と神の属性について考え、自分も神のようになるよう努力する。……



こうして彼は乾地農法と灌漑計画の生みの親となった。彼の著書や論文は、フランス語やイタリア語、アラビア語などに翻訳、出版され、合衆国やカナダだけでなく全世界の乾燥地域で広く活用されるようになった。また、合衆国の内務長官に呼ばれて、合衆国の土地改良に関する法案や法規の改正にも携わった。さらにユタ州立大学の学長（1907—1916年）およびユタ大学学長（1916—1921年）を歴任した。そして1921年3月には、ハーバード大学の学生時代に創った彼の詩は、アレキサンダー・シェライナーの作曲により、現在末日聖徒の讃美歌に収められている。「とわの生命に導きたまえ」と題するこの詩には、次のような一節がある。「われに信仰を、大いなる知識を与えたまえ。父よ、わが祈りを聞きたまえ。」（英文讃美歌141番）

ジョン・A・ウィツツォー兄弟の生涯は、教会だけでなく、全世界の若人、特にこれから大学に入り、社会に出て、家庭生活を営もうとする若人にとって最高の模範である。

彼の言葉をもう一度読んでみよう。

「人生で幸福を得るためにには、清い心と明らかな良心を持ち、主を畏れ、主の戒めを守ることである。……そこで私は今後の自分の生活を正す意味で次のような実行目標を立ててみた。」

このように、若人が皆自分の人生を正す基準を列記してみることは非常によいことである。ウィツツォー長老は、若人に対してしばしば、「まず約束しなさい。そして、それを守るようにしなさい」と勧告している。

真理と知識を求めてやまない彼の決意は、若い末日聖徒の中でも傑出していた。ふたつの州立大学の学長のほかに、ブリガム・ヤング大学の運営委員会の会員も兼ね、まさに大

学の先駆者的役割を果たしてきた。さらに教会の教育委員長に2度も選ばれている。このような彼の決意の底流にいつも真理の探究、あるいは知識の拡大があったが、それ以上に大きな位置を占めていたのが、真理の源である天父への信仰であった。しかもイエス・キリストを信じる信仰は単に福音の第一原則にとどまらず、「さらに大いなる知識」ともいえる信仰を指すことを、彼はよく知っていた。

ハーバード大学の学生時代に創った彼の詩は、アレキサンダー・シェライナーの作曲により、現在末日聖徒の讃美歌に収められている。「とわの生命に導きたまえ」と題するこの詩には、次のような一節がある。「われに信仰を、大いなる知識を与えたまえ。父よ、わが祈りを聞きたまえ。」（英文讃美歌141番）

私たちは、今日直面する数多くの困難に打ち勝つことができるだろうか。資産、家族の援助、あるいは高い地位にいる人の後ろ盾なしに、今日の世の中を生き抜いていくことができるだろうか。信仰と知識を一致させることができるだろうか。

確かにできるはずである。

では、どのようにして。

ウィツツォー長老が若い頃に自分の人生の計画を立てたように、私たちも人生の指針となる基準を定めることによってである。彼の模範は、今日のすべての若人に当てはまる。

ウィツツォー長老はその著書「真理の探究」(*In Search of Truth*)の中で、私たちの従える原則を示している。それは彼にとって非常に効果的な原則であった。恐らく私たちにも役立つ原則となるはずである。「仕事、仕事、仕事。勉強、勉強、勉強。祈り、祈り、祈り。」



砂漠は喜びて花咲き



マルビン・レビット

どこか乾燥した土地、それもあまりの暑さのために沼地も一瞬のうちにサハラ砂漠のようになってしまうほどの土地を想像してみていただきたい。そのような土地から最後の一滴まで水をしぼり取り、照りつける太陽の下で一週間ほど風に当てて乾燥させたとする。それでもまだ、アタカマ砂漠の乾きに比べれば、半分にも満たない。アタカマ砂漠とはそれほど乾燥しきった所である。

チリ北部の4分の1を占めるこのアタカマ砂漠は、過去20年間の降雨量がわずかの0.8ミリである。鋭いとげを持つ、砂漠で最も生命力のあるサボテンさえも、この乾燥し切った砂漠には見られない。目に入るのは、どこまでも続く不毛の大地だけである。それでもほんの所々に、山々から流れ出る小さな流れが見られる。このような荒涼とした不毛の大地には、微生物でさえ生きていけないようと思われる。

ところが、このような砂漠にも幾つかの市が開けている。その中のひとつアリカは、チリ最北端にあり、アタカマ砂漠の中でも最も乾燥した地域に建てられた市である。紺碧の太平洋と不毛の荒野の間に位置し、市は木々や草花の緑にあふれている。アリカはまばゆいばかりに明るい市である。家々や商店は原色に塗られて鮮やかで、人々は明るく、いつもリズミカルな音楽が流れている。休日や祝祭日ともなると、アリカの市は活気に満ちる。

この明るく幸福な市で、これまた最高に明るくて幸福な人々はと言えば、そう、末日聖徒である。アリカにあるふたつのワード部に

は、大勢の献身的な若い教会員が集っている。彼らは戒めを守り、伝道や結婚、健全な家庭を築くための準備をしながら、自分たちの素晴らしい時間を過ごしている。彼らはスポーツやダンス、集会、パーティーと一緒に参加し、またアリカの浜辺に出て寄せる波と戯れている姿を見かけることもある。

11月の春の午後の日射しの中で、私たちはよくそのような光景を目にする。市営バスの終点になっているアリカの浜辺には、愉快で楽し気な若い男女の一団がぞくぞくとバスから降り立ち、軟らかい砂を蹴って済へと駆けて行く。頭上にはエル・モロと呼ばれている巨大な鉛色をした絶壁が迫り、その姿はアリカの南の地平線を覆い隠さんとしている。やがて浜辺には、一瞬のうちに色とりどりのタオルの花が咲き、ドッジボールをしようという声が出る。しかしボールがない。そういううちに、ひとりの青年のタオルが消える。それからワイワイ言いながら幾つもの結び目でき、それをだれかの靴ひもでしっかりと縛ってボールに早変わり。早速男女に分かれてドッジボールの試合が始まる。男の子たちは力があり、投げるボールも速い。しかし女の子たちもそれに負けじとなかなか上手である。試合はどちらが勝つかわからず、一進一退を繰り返す。若者たちが飛んだり跳ねたりするたびに、足もとの砂が激しく乱れ、ギラギラと照りつける真昼の太陽までも飛んだり跳ねたりしているように見える。こうして試合はいつ終わるともなく続けられる。そのうちどこからともなく本物のボールが登場してくる。

アリカの人々は笑うことが大好きだ。宗教上の祝祭日でも、一向に頓着しない。人々は休日を心から楽しみ、大きな祭も数多い。一年のうち最高の呼び物のひとつは、毎年2月に行なわれるカーニバルである。興奮に湧くこの祭の間、道行く人々は水の入った風船やコンフェッティ（色紙）や花を全身に浴びせられる。ピカドスの日（子供の日）には、これにさらにバケツに一杯の水や泥、靴墨、染料、卵など、半液体状のものが加わる。町の広場ではダンスやパーティーが催され、タキシードで着飾った木製の猿が置かれる。この猿はカーニバルのカルナベロン（祭の長）となり、パーティやパレードではだれもが最高の敬意を表わす。そして、カーニバルが終わりに近づくと、このカルナベロンは人々の涙と悲しみのうちに埋葬されるのである。

浜辺の若者たちの話によれば、チリの学校ではほとんど授業は半日で終わり、学生はそのほかの時間によく勉強しなければならないという。学校ではスペイン語、数学、音楽、英語、物理、化学、そのほかの選択科目を勉強している。期末試験で主要科目をひとつでも落とし、追試でも及第点を取れない学生は、留年ということになり、その他の科目も含めてもう一年間勉強し直さなければならない。言うまでもなく、試験に臨む学生たちの態度は真剣そのものである。最高の成績である7を取るために夜遅くまで勉強を続け、それでも、1（最低）を取るのではないかと悪夢に悩まされることがあるという。大学入試は難しいが、末日聖徒の学生たちは良い成績を取めている。

若者たちはまた、太陽の光を浴びながら、福音に対する気持ちは、福音より得られる祝福、責任についても語る。「私たちの将来について述べたマッコンキー長老の予言を成就す

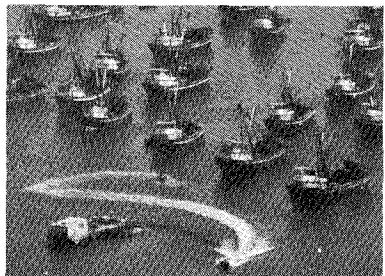
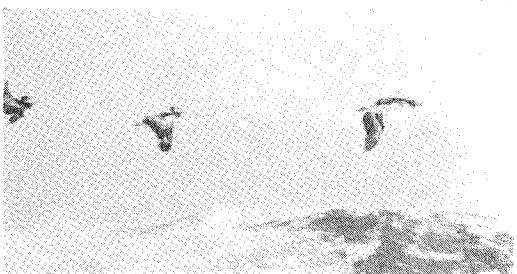
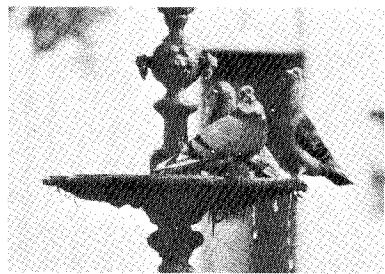
るために私たちがまずしなければならないことは、人々との交流においても行ないにおいても、模範になることです」と語るのは、エリーソベト・サンチバネツである。さらに彼女はこのように言う。「そうすれば、正しいことをする人は本当の幸福な生活ができるということがみんなにわかっていただけだと思います。ふさわしい教員はいつも平安を感じます。それで、この平安を感じていない人々は私たちの模範を見たら、変わると思うのです。そして、毎日、福音を勉強したいという人々が大勢出てくることでしょう。」

1977年3月1日、十二使徒評議員会のブルース・R・マッコンキー長老は、チリの首都サンチャゴで開かれた地域大会で次のように語った。「チリには現在7つのステーキ部がありますが、それが70倍になる日が来るでしょう。また、250名いる熱心なチリ人の宣教師が数千人に増える日が来るでしょう。私は、末日聖徒イエス・キリスト教会がこの国で最も大きな影響を及ぼす存在になる日が来る事を知っています。……主はこの地に住む人々の義しさのゆえに、この国に豊かに恵みを注がれるに違いありません。」

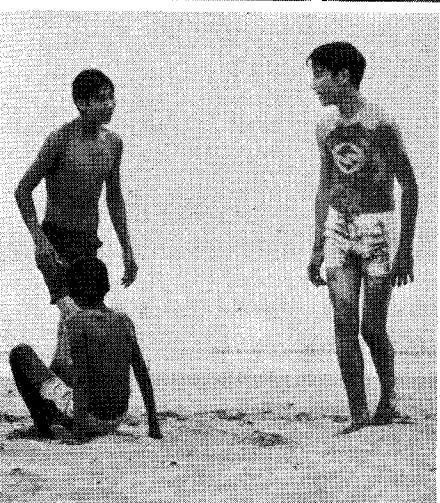
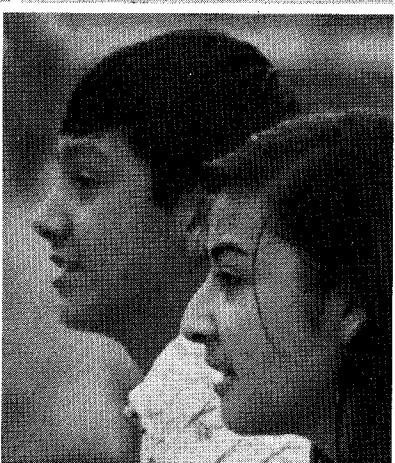
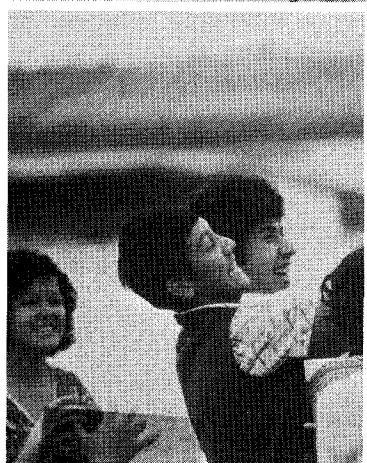
最近改宗したある人は、このように言い添えている。「教会で特に素晴らしいのは、そこに集っている人々です。皆さんとても暖かくて、愛に満ちた方ばかりです。私が教会に来た時、皆さんが心から歓迎して下さいました。」

伝道を終えて帰って来たばかりのサントス・アリタミラノ・エスピノサはこう語る。「私たちは自分の兄弟や姉妹たちに真理を知つてもらい、彼らも永遠の生命を得る機会にあづかられるように助けなければなりません。」

彼女は、教会幹部の勧告に従った経験を次のように話してくれた。「あれはキンボール大管長が使徒の時でした。10年前のことです。」



チリの北岸では、紺碧の太平洋に面するよう に世界で最も乾燥した所といわれるアタカマ砂漠が続いている。その砂漠の町アリカの この20年間の降雨量が0.8ミリというから、 まさに驚きだ。そんな中で、アリケノスの人々は、地下水を利用したり、豊富な水産資源を使って、幸福な日々を送っている。



フンボルト寒流の影響でチリの海岸は必ずしもスイマーにとってよいところとはいえない。しかし、アリカの海岸だけは例外である。沖を流れる暖流と穏やかな波によって、1年のうち9カ月も海水浴ができる。

キンボール大管長は、『苦難の時が来るので、自らを備え、それぞれの家庭で食糧を貯蔵するように』と、おっしゃいました。そして数年前、チリは食物がなくなるという苦難の時を経験しました。予言が成就したのです。私はこのことを思い出すたびに、予言者の勧告に従うことがどんなに大切な大切かを感じるのでした。』

ヘクター・ノボアンはまたこのように語る。『私は子供の時から神への信仰を育んできました。福音を知っている今、私は、人がこの世で受けのことのできる最大の祝福は福音を知ることであると、声を大にして宣言することができます。

私は、主が私を愛して下さっていることを知っています。主の愛は本当に大きいです。ですから主を心から讃美する時、私は全身が大きな喜びで満たされ、主をとても身近に感じます。もし私の心を覆う幕が取り去られたら、私は主御自身のことや、主と共にいた日々のことを思い出せることでしょう。

私たちは、福音を生活に取り入れることによって完全な者となり、主のみもとに帰るための備えをすることができます。これは確かです。』

アリカに交換留学生として来ている北米出身のある青年は、アリカの若い会員たちを大いに賞賛して次のように語っている。

『彼らは実に正直です。日曜日の朝に、自分には聖餐のテーブルに着く資格がないと感じた人は、聖餐式を行なう前にそのことを申し出ます。私は、今お世話になっているチリ人の家族を自分の家族のように愛しています。彼らは教会員ではありませんが、最高に素晴らしい人たちです。それでも、アリカの教会員の家庭を訪ねるといつも、神権者が管理、福音の原則に従っている家庭との違いに驚かされます。』

最後に、アナ・マリア・リベラが、信仰、

希望、決意についてグループ全体の気持ちを説得力のある表現で、次のようにまとめてくれた。『もしも私たちに道を示し、まことの道へと導いてくれる素晴らしい光がなかったら、私たちの存在はまったく意味のないものになってしまいます。まことの道は、私たちを天の家に、つまりこの地球に住むという素晴らしい機会を与えて下さった父なる神様のみもとに導いてくれるのです。

何にもまして私たちは教会の仕事を一生懸命果たさなければなりません。教会の仕事は私たちを高め、満足感を与えてくれます。それに、仕事をする人を幸福にしてくれます。

私はイエス・キリストの存在を信じ、またイエス・キリストが人類に与えて下さった恵みを信じているので、主が私に望まれることを全身全霊を尽くして果たすつもりです。この道の行く手では天のお父様が両手を広げて私を待っていて下さいます。天のお父様は、私が障害を乗り越えて、私の兄弟姉妹と一緒にみもとに帰ってくことを心から望んでおられます。いつもこのことを忘れないで、主のみ業に献身したいと思います。

私たちは若いので、力も意欲も希望も愛もあります。そして、何よりもこの元気ではつらつとした燃えるような信仰が、物足りなさを満たし、闇に光を投げかけます。私たちはその信仰によって、新たな力と元気を得ながら、イエス・キリストがこの末日に地上に建てるごとを望んでおられる驚嘆すべき教会を築くのです。』

浜辺で語らうこの幸福な若者たちは、アリカに雨が降るのをまだ一度も見たことがない。多分これからも見ることはないだろう。しかし、彼らの中に宿るその精神と力をもってすれば、アタカマ砂漠がバラのように美しい土地となる日も近いことだろう。





人の起源と予言の成就

ジョージ・アルバート・スミス

第8代大管長ジョージ・アルバート・スミスは、世界史上最も困難な時代に大管長として召された。大管長の召しを受けて間もなく、第二次世界大戦が終わったことから、スミス大管長には、世界各地に住む聖徒たちの悲惨な生活を立て直すという重大な責任があった。教会は世界各地に広がり、伝道活動も再開された。教会の福祉組織を通して、食糧や衣類が何千箱も、ヨーロッパの聖徒たちに送られた。時には、ヨーロッパ内で援助し合うこともあった。スミス大管長は聖徒たちに、この愛ある行ないを続けるよう励まし、次のように述べている。「この悲惨な時代に私たちの援助の手が御父の他の子供たちのもとへ届くように。私たちの責任は今始まったばかりであり、これからも長く続くということを心に留めていただきたい。……私たちは主の戒めを守り、互に愛し合わなければならぬ。しかも、その愛は教会の境界線を越え、人の子らにまで届けなければならない。……私たちには、イエス・キリストの福音の教えを、地上のあらゆる国々、はるか遠くの地にまでもたらさなければならない。」(Improvement Era 「インプレーブメント・エラ」1945年12月号)

スミス大管長は1870年4月4日、ソルトレーカ・シティーで生まれた。1945年5月21日、

75歳で大管長に召され、聖任された。その4ヵ月後の1945年9月23日に、アイダホ・フォールズ神殿を献堂した。スミス大管長はおよそ6年間大管長の責任を果たし、1951年4月4日、丁度81歳の誕生日に世を去った。

スミス大管長の先祖には傑出した人々が多い。彼はジョン・ヘンリー・スミス長老の長男である。ジョン・ヘンリー・スミス長老は、ジョン・ティラー大管長の時代に使徒に召され、ジョセフ・F・スミス大管長の副管長を務めた。また彼が名前を受け継いだ祖父のジョージ・A・スミス長老は、予言者ジョセフ・スミスによって使徒に召され、ブリガム・ヤング大管長の副管長を務めた。曾祖父はジョン・スミスで、予言者ジョセフ・スミスのおじである。彼はまた3代目の大祝福師でもあり、シオンのソルトレーカステーキ部の初代ステーキ部長を務めた。

ジョージ・アルバート・スミス長老は、1903年10月8日に使徒に召され、1943年7月8日に十二使徒評議員会会長に聖任された。次の説教は、1945年4月8日、大管長に召される数週間前、まだ十二使徒評議員会会長であった時、全国にラジオ放送を通じて語ったものである。

聖

書には天父の勧告が記されている。私は創世記第1、2章に述べられていることを何のためらいもなく受け入れている。すなわち、初めに神は天と地と、人を含む地上のすべての生き物とを創造されたのである。

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち神のかたちに創造し、男と女とに創造された。

神は彼らを祝福して言われた、『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。』（創世1：27—28）

「これが天地創造の由来である。主なる神が地と天とを造られた時、

地にはまだ野の木もなく、また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。」（創世2：4—5）

これはまだ靈的な創造の段階である。次に、物質的な創造が続く。

「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。」（創世2：7）

主の創造されたすべての生き物が、それぞれの種類に従って繁殖することは、天父の計画であった。アダムとイヴは神の子供であり、最初の両親である。地上に住む人はすべて、アダムとイヴの子孫である。神はアダムとイヴにあらゆることを自分で決定する自由意志をお与えになり、彼らに自らの行ないに対して責任を負わせられた。ふたりはエデンの園で、天父から教えを受けていた。それらの教えは、ふたりの子孫のために与えられたのである。

聖書の年代からすると、最初の両親が地上での生活を始めたのは、今から約6000年前の



ことである。主は彼らに、どのように生活すればよいかを教えられた。また、アダムの子孫に対しては予言者を召して主の代弁者としての聖なる務めを与え、彼らに幸福な人生を送る方法を教えられた。その結果、死期を迎えた時に、彼らはこの世で得た豊かな人格と知識とを携えて、次の世に赴くことができたのである。天父の教えに添って生活する者は、この上ない報いを受け、この世でも来るべき世でも最高の幸福を味わうことだろう。

特に予言者たちは、時折明らかにされる真理を記録するように求められた。そしてその記録は代々受け継がれ、子孫のために多大の益をもたらすこととなるのである。このようにして今日私たちは、主が世の初めに明らかにされた教えの記録を手にすることができるのである。これがすなわち聖書である。それは過去の出来事を伝えているだけでなく、将来起こるはずのことをも幾世代の前から語っている。また、定められた時に、その予言が成就したことでも伝えている。

予言者アモスはこう述べている。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」（アモス3：7）私は、世の中に起こった極

めて大切なことは必ず主が予言者を通してあらかじめ人々に勧告しておられるということを知っている。主は、人々が無知の中にとどまることなく、自らの生活を計画し、望むなら恵みを得ることができるようにして下さったのである。このことがさらによく理解できるよう、幾つかの出来事についてお話をしたい。

ノアがそのよい例である。ノアは主から、箱舟を造り、やがて襲う洪水から義しい者だけが守られるようにしなさい、と命じられた。ノアは箱舟を造り、120年間にわたって民に悔い改めを叫んだ。人々に警告の声を発したのである。しかし、人々はすでに悪に染まり、その警告の声に聞き従うことができなかつた。彼らは自由意志によって正義よりも邪悪を選んだのである。雨が降り、洪水が起つた。そして救われたのは、ノアとその家族8人だけである。何度も警告されたにもかかわらず、人々はかたくなに悔い改めを拒み、そして滅ぼされた。

また、アブラハムとその子孫の場合もそうである。彼は自分の子孫が他国へ行き、そこで400年間仕えた後、ばく大な資産を携えてそこを出るであろうと告げられた。このことは後に、アブラハムの子孫のひとりであるモーセによって文字通り成就され、イスラエルの民はエジプトを逃れて、約束の地に導かれたのである。

ヤコブの誠実な息子で、兄たちによって売られたヨセフがエジプトの獄屋に捕われていた時に、パロがひとつの夢を見た。パロはその夢のことで思い悩んだ。しかし王の知者はだれもその夢を解き明かすことができなかつた。パロはヨセフが夢の解き明かしをするこ

とを耳にし、早速彼を呼び寄せた。ヨセフはパロに、自分が夢を解き明かすのではなく、神が答えを下さるであろうと言つた。こうしてヨセフは主から答えを受け、その夢が大きな意味を持つことを告げた。すなわち、全国に7年の大豊作があるが、その後7年のききんがあるので、豊作の年に食糧を蓄えておけば、ききんになつても滅びることはないと言つたのである。パロはヨセフの解き明かしと忠告を受け入れた。そしてパロは報いとして、彼を王の次の位である全国のつかさにしたのである。そして14年後、ヨセフの解き明かしが現実となり、エジプトの民は飢えから救われた。

エレミヤが予言したエルサレムの滅亡と、民の70年間にわたる捕囚の予言についてもそうである。これはバビロンのネブカデネザルによって成就された。やがてエルサレムは美しい神殿もろとも焼かれてしまった。王女や貴族、職人、そのほか一般市民など大勢が捕虜としてバビロンに連れて行かれた。その際、神殿の聖なる器も奪われてしまった。

ペルシャ王クロスが生まれる140年前、予言者イザヤは彼の誕生を予言し、彼の名前までも告げ、彼がバビロンを滅ぼすと言つてゐる。さらに、クロスはユダヤ人の願いが何であるかもつゆ知らず、エルサレムを再建するであろうともイザヤは予言した。

クロスは50歳の時、様々な小国を征服した後、軍隊を従えて最強の都市バビロンの前に姿を現わした。バビロンの周囲には難攻不落の、90メートルあまりの高さの城壁がめぐらされ、鉄と真鍮のがんじような門が据えられていた。クロスは城壁から攻撃せずに、バビロンの中心地を流れるユーフラテス川を下り、

川底を伝って城壁の下を通って、市内に攻め入った。そして、ペルシャザルが廷臣とともに酒に酔い、父ネブカデネザルがエルサレムから持ってきた主の宮の聖なる器を俗用に用いていたすきに、クロスはいとも簡単に市を占領してしまったのである。

クロスは市内でヘブル人の予言者ダニエルに会った。ダニエルはかつて宮殿の塗り壁に書かれた文字を解き明かし、ペルシャザルに、「あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです」と答えた人である。こうしてユダヤ人の記録を手にしたクロスは、イスラエルの神がエルサレムの再建を自分に命じておられることを知った。そこでクロスは即刻、ユダヤ人にエルサレムへの帰還命令を発し、ユダヤ人がエルサレムと神殿を再建できるよう援助した。これはエルサレムが崩壊してから、丁度70年目のことである。こうして100年以上も前に述べられたエレミヤの予言が成就したのである。

バビロンの崩壊もそのよい例である。バビロンが全盛を極めている時に、イザヤはこの都市が崩壊することを予言し、「ここにはながく住む者が絶え、世々にいたるまで住みつく者がなく」と述べている。バビロンは完全に破壊し、川の水があふれてその地を埋めてしまった。そして2千年以上たった今日でも、当時最強とうたわれたこの都市は廃墟の山と化したままである。

旧約聖書には、信じられないような予言が確かに成就していることを示す記述が随所に見られる。しかし、主の啓示によってのみ、予言者は何が起こるのかを知ることができるのである。予言を成就させることができるのである。

は、神のみである。イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ヨセフたちは、普通の人々と同じ人間である。しかし、彼らは主の代理人として選ばれ、彼らの言葉は全能者の靈感によって導かれ、その約束は主のみ力によって成就される。

次に、新約聖書に記された数ある予言のひとつを取り上げてみよう。ルカ伝第21章の全文を読んでいただきたい。

「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたときりなさい。」これは、エルサレムと神殿、ならびにユダヤ人国家の1900年にわたる行く末を予言したものであり、現在もこの予言は成就の過程にある。

紀元70年にエルサレムはローマ軍により包囲された。その時、イエスが告げられた警告を心に留めていた忠実な弟子たちは山に逃れた。次いで、エルサレムは長い攻撃を受けた末ローマ軍の手に落ち、住民は食糧難と疫病と武力に苦しんだ。また捕われの身となり、50万のユダヤ人の命が失われた。国は崩壊し、神殿は倒され、石はひとつ残らず崩れ落ち、人々は地上の様々な国々へ散らされていった。すべて予言通りである。

エルサレムもバビロンも、邪悪な行ないを悔い改めなければならない、さもなければ罰を受けると主の僕たちから警告されていた。しかしかたくなにそれを拒み、結局滅亡した。そのほかにも豊かになり力を得ると邪悪になり、ついには忘れ去られてしまった都市は枚挙にいとまがない。このような出来事を振り返って考えてみると、今日の世は、そこに住む人々の邪悪さゆえに、悲しみと破壊の実を刈り取っていると言っても言い過ぎではない。

主に立ち返らなければ滅びが訪れることを過去の歴史がはっきりと教えてるにもかかわらず、私たちはなぜ天父の勧告を無視し、そのかたくなきゆえに罰を受けている世の人々の仲間に加わって、邪悪への道を歩むのだろうか。私たちが救われる道は悔い改めしかない。取り返しがつかなくなる前に、悔い改める必要がある。

私たちは地主ではない。地上のどの地、またそこから得る富も、私たちのものではない。ただ一時的に借りているだけである。死ぬ時にはすべてを残していく。私たちは生まれる時も、この世を去る時も裸一貫である。地球は主のものであり、主の戒めを守るという賃貸料を払ってこそ、祝福を得、この世にあっても来るべき世にあっても喜びを得ることができるのである。

私たちの来世での位は、現世での生活によって決まる。すべての人がこの世の働きに応じて裁きを受け、自分に見合った段階の栄光を受けるのである。

主イエス・キリストがこの世に来て、私たちの贖いのために命を捧げ、すべての人類が死から復活できるようにして下さってから、2000年ほどたつ。主は御自ら復活の初穂となられた。そして主は私たちに、自分自身のように隣人を愛すること、すべての人に善き行ないをするようにと教えられた。新約聖書に記された主の教えは、聖書の中でも最も価値ある部分と言えよう。主はこう言わわれている。「聖典を調べなさい。あなたがたは、聖典の中に永遠の命があると思って調べているが、聖典は、わたしについてあかしをするものである。」(ヨハネ 5:39 欽定訳より和訳)



主は、聖典を学ぶことがいかに重要であるかを御存じであった。聖書の教えを最大限に生かすことのできた民は、この上ない成功と幸福をかち得、その働きのあらゆる分野で世に光明をもたらしてきた。なぜなら、彼らは天と地を支配される神の導きによって恵みを受けたからである。ヨブはこう記している。

「しかし人のうちには靈があり、全能者の靈感が人に悟りを与える。」(ヨブ32:8 欽定訳より和訳)このような時代にいる私たちは、正義に従うことによって靈感を求めなければならない。ほかに道はない。

私はこの国にあって、また他の国々でも、大勢の知恵ある義しい人々と接することができるのをうれしく思う。そのような人々のお陰で私の人生が豊かになったことを感謝している。私たちが皆不死不滅になり、主の日の光榮の王国となるこの地上に永遠に住むことができるよう、心から求めていただきたい。この世の人生のたそがれ時にあって、私は皆さんに、神が私たちの御父であり、実際に生きておられること、私たちを愛し、私たちの幸福と昇栄を望んでおられることを証申し上げる。この証を私の愛と祝福を添えて、私たちの贖い主、愛する御子イエス・キリストのみ名により申し上げる。

私はこれから毎月30名から50名の宣教師がこの日本人宣教師訓練センターの門をくぐり、弱くて単純な者であっても、謙遜な態度と強い信仰と証と、神の聖き「みたま」の力によって、福音を待ち望んでいる大勢の準備された人々に神のみ言葉を宣べ伝え、この日本の地に立派なシオンを幾つも築き上げる基礎となることを、私はよく知っています。

さらに素晴らしいことに、菊地長老は、やがてアメリカの訓練センターと同じように、

日本でも外国語の訓練が行なわれるようになり、この日本の地から東南アジアの国々や南米の国々にも、宣教師が出て行くようになるとおっしゃっています。誠に主の奇しきみ業はだれもこれを止めることができません。このみ業は宣教師の熱心な働きとみたまの力によってさらに力強く広がっていき、教員の助けを得て、飛躍的に発展することでしょう。これらのことときをイエス・キリストのみ名により証申し上げます。アーメン。



東京神殿ニュース

バプテスマ・フォントの雄牛の像、制作中

神殿の建築工事が順調に進むなか、バプテスマ・フォントの12頭からなる雄牛の像の制作も今、茨城県友部市の石材工場で進められています。

大理石の種石によってつくられるその像がやがて美しさを添えて置かれる日も間近いことでしょう。



公 告

会員その他利害関係人各位

規則第18条の定める手続を経て、下記の通り教会用地を買収しましたので宗教法人第22条の規定によって公告します。

昭和54年6月25日

宗教法人 末日聖徒イエス・キリスト教会 代表役員 菊地良彦

支部／ワード部	所 在 地	面積(土地)	(建物)
函館支部	函館市柏木町97番33	1,322.33m ²	336.48m ²
姫路支部	姫路市新在家本町三丁目	555.66m ²	656.64m ²
宇部支部	宇部市神原町二丁目3790-18	1,424.00m ²	1,351.14m ²
松山支部	松山市山越一丁目131-1	730.21m ²	871.20m ²
東京第七ワード部	松戸市上本郷字二丁目3756	503.07m ²	478.68m ²
倉敷支部	倉敷市沖48-4	829.33m ²	429.49m ²

